



沈黙を聴くひと

～言葉にならない声を聴く物語～

コミュニケーションの本質を知る、ある少女の旅

—序章—



山あいの小さな村に、ユイという少女が暮らしていました。

ユイには誰にも言えない秘密がありました。

それは、「人の心の声」が聞こえるということ。



言葉にならない声。

口には出さない本当の気持ち。

ユイには、それが小さなささやきのように聞こえるのです。

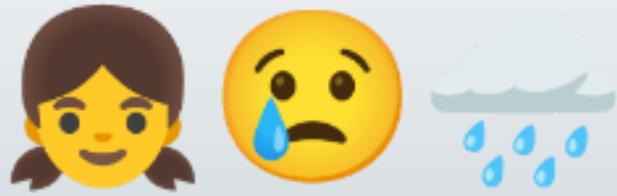
「お母さんの『大丈夫』の裏には、いつも疲れた声が聞こえる」



笑っている人の心から、悲しみが聞こえる。

怒っている人の心から、寂しさが聞こえる。

ユイは、その声を聞くたびに苦しくなりました。



「私は、みんなの悲しみを聞くためだけに生まれたの？」

ユイは誰にも話せず、一人で抱え込んでいました。

この力は、呪いだと思っていたのです。

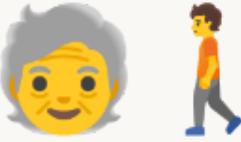
— 第一章 出会い —



ユイが12歳の春。

村に、一人の老人がやってきました。

白い髪をたくわえ、穏やかな目をした旅人でした。



老人は村のはずれに小さな小屋を建て、

「話を聞く仕事」を始めました。

村人たちは不思議に思いましたが、

やがて一人、また一人と老人を訪ねるようになりました。



「あの方に話を聴いてもらうと、なぜか心が軽くなる
の」



「不思議だ。何もアドバイスしないのに、元気が出る」

ユイは、とても不思議に思いました。



ある日、ユイはこっそり老人の小屋を覗きました。

村の女性が、泣きながら話していました。

でも老人は、**ただ静かに聴いているだけ。**

何も言わない。ただ、聴いている。



その時、ユイは**信じられないもの**を見ました。

女性の心から聞こえていた**悲しみの声**が、

少しずつ、少しずつ、**静か**になっていくのです。

「どうして...？ 何もしていないのに...」



ユイは思い切って、老人を訪ねました。



「あの…私、人の心の声が聞こえるんです。でも、それ
が苦しくて…」

初めて誰かに打ち明けた秘密でした。



老人は驚きませんでした。

むしろ、懐かしそうに微笑んで言いました。



「そうか。君も『沈黙を聴くひと』なんだね」



「沈黙を…聴く？」



「人は言葉を話す。でも、**本当に伝えたいことは、**

言葉と言葉の**あいだ**にあるんだよ」

老人もまた、同じ力を持っていたのです。

— 第二章 修行 —



その日から、ユイは老人のもとで学び始めました。

「聴く」とは何か。

「沈黙」にどう応えるのか。



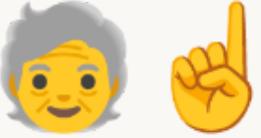
「ユイ、誰かの話を聞くとき、何を考えている？」



「えっと…『どうしてあげよう』とか、『何て言えばいいんだろう』とか…」



「それが**最初の間違い**なんだよ」



「聴いている時に『次に何を言おう』と考えたら、
もう聴いていないんだ」



「相手の言葉を、ただ受け止める。
それだけでいいんだよ」



「でも、何も言わないと、相手は不安になります
か？」



「言葉は必要ない。大切なのは...
『あなたの気持ち、ちゃんと聴こえているよ』
と、態度で伝えることなんだ」



ユイは少しづつ理解し始めました。

人が本当に求めているのは、**アドバイス**じゃない。

「わかつてもらえた」という感覚なのだと。



「人は誰かに話を聴いてもらうとき、
実は**自分自身の声を聴いているんだよ**」



「だから、聴き手は**鏡**になればいい。
相手が自分の心を映せる、静かな鏡に」

— 第三章 試練 —



一年が過ぎた頃、老人が言いました。



「ユイ、そろそろ**本当の修行の時間だ**」



「村の東に住むタケルという男の子がいる。

彼は一年前に母親を亡くしてから、誰とも話さなくなったり



「彼の**沈黙の声**を聴いてごらん」



タケルは13歳。

一人で古い家に住み、誰とも目を合わせず、

一言も話さない少年でした。

村人たちは遠巻きに見るだけで、誰も近づきませんでした。



ユイはタケルの家を訪ねました。

タケルは無表情でユイを見ましたが、

追い返しはしませんでした。

ユイは何も言わず、ただそばに座りました。



タケルの心から聞こえてきたのは、

今まで聴いたことのないほど深い悲しみでした。

「どうして僕を置いていったの」

「最後に『ありがとう』も言えなかった」



ユイは泣きそうになりました。

でも、老人の言葉を思い出しました。

「聴くとは、相手の感情を背負うことじゃない」

「ただ、『ここにいるよ』と伝えることだ」



ユイは毎日、タケルのもとを訪れました。

何も言わず、ただそばにいる。

時には一緒に空を眺め、時には一緒に黙って座る。

一週間、二週間、一ヶ月…



春が来た頃、タケルが初めて口を開きました。



「...なんて、毎日来るの？」

ユイは静かに答えました。



「あなたの声が、聴こえたから」



「…俺、何も話してないよ」



「うん。でも、**声は聴こえた。**

すごく悲しくて、すごく寂しい声」

タケルの目から、涙がこぼれました。

一年間、誰にも見せなかった涙でした。



「誰も…わかってくれないと思ってた…

僕の気持ちなんて、誰にも…」

ユイはタケルの手をそっと握りました。

言葉はいらなかった。

「聴こえているよ」

その気持ちが、伝わればよかったから。

— 終章 繙承 —



ユイが老人のもとに戻ると、

老人は優しく微笑んでいました。



「よくやったね、ユイ」



「おじいさん、私わかりました。

この力は**呪い**じゃなかった」



「聴こえるからこそ、寄り添えるんですね。

言葉にできない苦しみを抱えた人に」



「その通りだよ、ユイ。

人は『**聴いてもらえた**』と感じた時、
初めて自分の心と向き合える」



「君はこれから、たくさんの人との
沈黙を聴くことになるだろう」



数年後、ユイは村を出て旅に出ました。

「沈黙を聴くひと」として、

言葉にならない声を抱えた人々のもとへ。



ユイは気づいていました。

特別な力がなくても、誰にでもできることがあると。

それは、「ただ、聴く」ということ。

相手の言葉の裏にある気持ちを、

想像しながら、心を傾けること。

✨ この物語があなたに伝えたいこと ✨

相手の言葉の裏にある感情に気づくこと。

人は「大丈夫」と言いながら、助けを求めている
ことがある。

「怒り」の裏には、「悲しみ」が隠れていること
がある。

言葉だけでなく、その奥にある気持ちに耳を傾け
てみてください。

おしまい



今日、誰かの「沈黙」に気づけますように。



聴くことは、愛することの始まり。

— 沈黙を聴くひと —